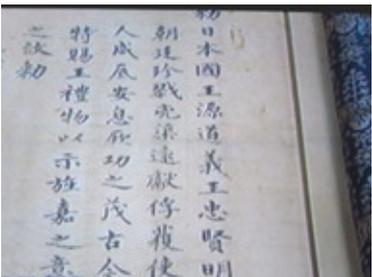


勘合貿易への道程

勘合百枚



日本国王源道義宛の勅書

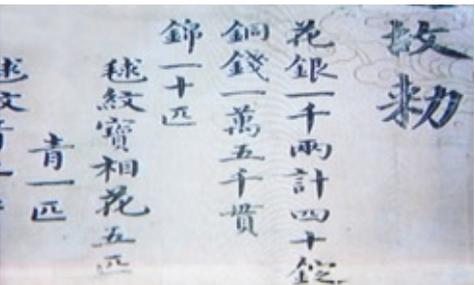


北山殿の一角を占めていた金閣



頒賜物（下賜された物）の銅銭

明への朝貢に対して
銅銭一萬五千貫が頒賜された



タブレット地域紙「市民プレス」の電子版として編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

-PAGE 4	明朝から朝貢を求められて 懷良親王と將軍義満との争い		
-PAGE 5	日明交流は懷良親王に始まる 征西將軍として九州へ		
-PAGE 7	明の建国と倭寇の活動	-PAGE 9	手紙を受け取った懷長親王は
-PAGE 10	銅銭の供給を中国に頼る	-PAGE 12	今川了俊が太宰府に
-PAGE 15	タブーに挑戦した若き義満	-PAGE 18	建文帝が即位する
-PAGE 20	永楽帝が即位する	-PAGE 22	義満が行った明使接見儀礼
-PAGE 25	日朝交易年表	-PAGE 30	「勘合料紙印形」は・・・
-PAGE 32	永楽帝の勅書	-PAGE 36	遣明船

明朝から朝貢を求められて

寛平六年(894)、菅原道真の建議によって遣唐使の派遣が停止され、以来約五百年の間、中国大陸との間では、国と国との正式な外交、交易は途絶えていた。

大陸との外交・貿易が再開されたのは、明の建国に始まる。西暦1368年、我が国では南北朝時代を経て、三代將軍の義満が政権を確立したころのことになる。

建国して間もなく、明朝の皇帝は、周辺諸国に対して朝貢の形式(明朝に貢物を捧げ、返礼として明朝は諸国に恩賜を下付する)による交易を求めた。

懷良親王と將軍義満との争い

明朝は九州博多の太宰府に使者を送り、征西府將軍の懷良親王を国王と認めて国交を開いたが、將軍義満が博多に派遣した九州探題今川了俊によって懷良は打倒される。義満は自らを国王に擬して、明朝との正式な国交を結ぶことに成功し、懷良に代わって両国間の

貿易は開始された。

勘合貿易で経済は豊かに・・・

正規の交易を双方が確認する手段として「勘合」が用られ、貿易によって、將軍義満は多大の利益を挙げる。また足利政権は経済基盤を豊かなものにした。

ただし、明朝との勘合貿易が軌道に乗るまで、ときは南北朝の時代から足利政権の確立に至る道程は長かった。波高き年代を追って、以下、明朝との勘合貿易が成立されるまでの波乱万丈の物語りの道筋を追うことにしたい。文献・橋本雄著『日本国王と勘合貿易』

(2013年NHK出版発行)。

日明交流は懷良親王に始まる

後醍醐は、北朝方に対して南朝の劣勢を覆すため、自らの皇子を東国をはじめ、奥州、北陸などの各地に送って参戦させた。つぎの絵図に、それぞれの皇子が派遣された地域を示した。

征西將軍として九州へ

後醍醐の六番目の皇子として生まれた懷良親王は、暦応元年・延元三年(1338)、綱旨により、征西將軍として下向した。そのときわずかに九才だった。

十人余りの従者に付き添われ、瀬戸内海の伊予くちなしま那島を拠点として、興国三年(1343)、有力な土豪の力を得て海路南九州の谷山に上陸した。正平三年(1348)には、肥後、筑後を経て、北上する。正平八年(1353)、懷良側の菊池氏、少弐氏は、針摺原の戦いで一色氏に大勝して筑前博多に進み、正平十四年(1359)には、懷良軍の菊池氏が、大保原の戦いで少弐氏を破る。正平十六年(1361)ついに太宰府に入って、懷良はここに征西府を移した。





明の建国と倭寇の活動

明が建国した紀元1368年（明の年号では「洪武元年」）、朝鮮半島や中国大陸の沿岸では、食料を奪って人身の略奪を行う海賊が活動していた。主に日本人だが、一部は高麗人か中国人と推測されている。倭寇（倭国は日本のこと）と呼ばれ、船の根拠地とされていた九州地方に対して、明朝から厳しい目が注がれていた。

倭寇の取締りと人貢を要求して

明の初代皇帝となった太祖洪武帝は、日本に使者を派遣して人貢を求め、山東半島や江南地域で猛威を振るう倭寇を禁遏（きんおつ：禁止）するように

要求してきた。

明朝は外交独占の方針を宣言し、周辺国の君主は明の皇帝に対して人貢することを求めた。なお貢物を捧げ、これに対して皇帝側が恩賜を与えることを朝貢といい、貢物を捧げることを進貢といった。

日本に使者を派遣したが・・・

この年（南朝は正平二十三年／北朝は貞治七年／応安元年）（1368）、十一月、明朝から日本に使者が送られた。だが五島列島付近で賊に殺害されてしまったとみられ、洪武帝からの詔書も行方知れずとなった。

翌年再び使者を差し向ける

しかし、洪武帝は翌年再び使者七名を送った。使者は博多に着き、大宰府に向かう。ここは律令国家の時代から対外関係の窓口となっていて、かつて唐や新羅の使者を応接した鴻臚館（唐の外交施設の「鴻臚寺」に由来し、「鴻」は大きな鳥、「臚」は伝え告げるの意で、「鴻臚」は外交使節の来訪を告げる声を意味していた）も大宰府の管轄だった。そのころ大宰府を掌握していたのは征西將軍懐良親王で、彼は楊載らが運んできた洪武帝の詔書を受け取った。



明朝皇帝・洪武帝

手紙を受け取った懐良親王は

その文面が威嚇的であるとして激怒し、直ちに使者五人を斬って残る楊載・呉文華の二名を投獄する。怒りのもとは「そなたを日本の国王に任ずるので倭寇の取り締まりに励め。従わなければ兵を送る」という詔書の文面であった。これは、明が振りかざす中国の華夷秩序などとは無縁な皇族として当然の反応であった。また、楊載ら二名は三ヶ月後に強制送還される。

この対応には憤慨したが・・・

明にとって倭寇問題が如何に深刻だったのであろうか、翌年、洪武帝は三度目の使者として趙秩らを派遣した。このとき、前回追いつ返された楊載も加わっていた。

懐良は考えを翻して・・・

このとき懐良は明への称臣入貢（しやうしん 臣下として貢物を持参する）を決めた、と明側の史料に記されている。一三七一年のことである。征西府は祖來（そらい）を使者として献物をもたせ、臣下の礼をとつたので、洪武帝は、懐良を「日本国王」として認証し、大統曆（註：曆を受けることは臣属することを意味する）と文綺沙羅（ぶんきさら）を授けることにした。

懐良の決断を促したものは？

趙秩は、与えられた任務を果たすべく懐良を説得したと考えられるが、懐良自身も、太宰府を押さえるためには、明との交易の利が武將を引き付けておくため有利であることに気付いたようだ。

銅銭不足が経済を圧迫していた

モンゴル襲来（元寇）以降も、日元間の貿易は続けられたが、十四世紀前半の元末に至ると倭商たちの暴動・騷擾（そうじょう）がたびたび起こり、南北朝動乱による日本の政情不安などのために日中貿易は衰退したので、その影響の一つとして、銅銭の不足に陥っていた。

銅銭の供給を中国に頼る

中世の日本では国家権力が銭をつくらず、その供給をもっぱら中国に頼っていた。

一九七六年、韓国の新安沖で沈没船（東福寺造営料唐船）が発見され、積み残されていた二十八トン、約八百万枚（八千貫文）にも及ぶ銅銭が引き上げられた。

十二世紀から十四世紀にかけてはほぼ毎年商船の往来が確認され、十三世紀半ばの史料に、倭船の往来が

銅銭
永樂通宝



「四五十舟を下らず」とあるので、年平均で二十〜三十隻程度の往復があったのではなからうか。

考古学的な資料に拠れば・・・

貿易都市博多で出土した銅銭の枚数を調べた最新の資料によれば、十四世紀前半と十五世紀後半とに数量的なピークがあり、その間に挟まれた時期として十四世紀後半に顕著な落ち込みが見られるという。

この低調期は、まさしく征西府勢力が九州北部に覇を築いていた時期である。つまり、征西府懐良の周辺では貨幣の絶対的な流通量が小さかったことが窺えるので、中国から銅銭を大量に入手することが同政権の緊急の課題であったことが推察されている。

明の使者が博多に向かう

文中元年／応安五年（1372）、懐良親王を冊封（称号・任命書・印章などの授受を媒介として取り結ぶ名目的な君臣関係）するために明州（寧波）から出帆した明使は、仲猷祖闡（臨濟宗大慧派僧）と無逸克勤（天台宗系教僧）ほかである。この前後の明側史料には、「日本国王良懐」と見え、つまり懐良は「日本国王」に擬えられていたことが判る。

しかし突然明使は捕縛された

仲猷・無逸ら明使一行は、その年五月、九州博多に上陸し、行き先は懐良が待つ大宰府であった。ところが、この使者たちは上陸するや突然引捕えられ、博多の聖福寺に監禁されてしまう。

「日本国王」の地に上陸した筈なのに、これは一体どうしたことなのか？。使者たちが驚くのは当然だが、実は、このわずか半年ほどの間に、九州の情勢は大きく転換していたのである。

九州探題今川了俊が大宰府に

遡って正平十六年（1361）に、懐良親王は大宰府に入って、南朝の九州攻略が成功した。懐良が最初に明使に接見し、明使を斬り捨てた正平二十四年（1369）は、まさに九州南朝の全盛の時期だったのである。一方、幕府はその体制に楔を打ち込むため、建徳二年（1371）、九州探題として足利一門の今川了俊が派遣された。

了俊は法名で、出家する以前は貞世と名乗っていた。武人としての実力はこの九州攻略で証明されたが、行政や政治家としての手腕にも秀で、また歌人としても盛名が高く、鄙びた九州では雅びな文化人として輿望を負い、九州攻略を有利に進めることができた。

九州探題は征西府を包囲する

今川は着々と大宰府を包囲する体制を作り上げ、了俊自身が九州に渡ったのはこの年の十二月だった。懐良親王が二度目の明使、趙秩に対して明に称臣入貢することを伝え、祖来とともに帰国させたのは、丁度この頃で、最初の明使が訪れた二年前とは、征西府を取り巻く状況は大きく変わっていたのである。

明使一行は捕縛されて・・・

今川は文中元年(二〇〇)の六月、征西將軍の懐良を追い、大宰府を奪回して北朝方の拠点とした。博多に上陸した明使の仲猷・無逸ら一行を捕らえたのは、九州探題の今川了俊だった。しかし、捕らえた了俊としても、突如として現われた異国の使節の対処には戸惑ったようだ。敵の本拠、大宰府を攻めようという戦支度の真最中だったからである。

明使と幕府との交渉

明の使者たちは百日余りの間、しやうふくじ聖福寺に留め置かれることとなった。だが、監禁生活の間に、征西府懐良らは今川軍の攻撃によって筑後に追われてしまった。そこで彼らは、上洛して時の権力者の將軍義満に謁見することを願い出た。このとき、京都の政権と渡り合つて彼らの上洛を実現させたのはちんていかいじ椿庭海寿という日本人の入明僧だった。椿庭は、「日本国

王良懐」宛ての明使(無逸・仲猷ら一行)に先立つて日本に戻されていたが、五年越しの対日交渉が実るかどうかの瀬戸際だったので、正式な日明関係の構築が進展するように、洪武帝が彼を事前に派遣したものと目されている。

またもや都に留め置かれる

無事に上洛したものの、明使一行は京都でさらに二ヶ月余り逗留されたので、博多での勾留を含めると、一年以上の歳月を過ごしたことになる。

「日本国王」号をめぐる・・・

室町幕府が瞠目したのは、懐良が明皇帝に対して称臣入貢を申し入れて認められ、すでに「日本国王」として認証された事実である。懐良は、貿易の利を介して九州の諸勢力を手懐けようとしていたのではあるまいか。とすれば、懐良の勢力を九州から完全に駆逐して、將軍自身が「日本国王」になるべきだ、と義満は思ったようだ。「日本国王」号を巡る争い、貿易権の争いとなったのである。

倭寇に対処すべし・・・

また、明使無逸らとの接触を通じて幕府が認識したのは、明の対日交渉の目的が、倭寇問題にあったという事実である。その交渉相手として、明が幕府將軍ではなく征西府の懐

良を選んだのは、彼が明からの倭寇禁遏要求に応じたからであり、倭寇問題に対処できれば対明外交資格を持ちうる、ということにもなる。

義満は国書を携行させる

文中三年(1374)、義満は仲猷・無逸ら明使一行を帰国させたが、間溪円宣・子建浄業らを同行させて、自らの名義の国書を携行させた。また、明側の歓心を買うべく、倭寇の捕虜百五十人を併せて送還することにした。

タブーに挑戦した若き義満

書状で国交を求めるといふ義満の対応は、当時の幕府内では非常な英断であった。管領の細川頼之ほか、明使を京に入れることすら反対の意見が多かったからで、わずか十六歳の少年將軍が、遣唐使停止以来の「タブー」を跳ね返したことの意味は大きい(参考書・橋本雄著、2023さかのぼり日本史外交篇)。



足利義満木像(等持院蔵)

義満、第一回目の挫折

しかし、このような対応で明との交流を開始することはできなかった。明は「人臣に外

交なし」という原則を掲げていたので、洪武帝は、義満の答使の入貢を拒否した。「表」(上表文)が無く、「国臣」の書に過ぎない、ということがその理由だった。

將軍義満が「国臣」であるとは、「日本国王」に認定された「良懐」の臣下を意味し、陪臣が表文を皇帝に奉ることは無礼なことだったのである。一度「国王」として懐良親王を認定したので、安易にそれを覆すことはできない。義満の外交デビューは空しく散った。

義満、二回目の苦惱

義満が挫折した直後の一三七四年六月、「日本国」から倭寇に掠奪された中国人一〇九人を返還する使節が入朝し、またその翌年、「日本国」からの「入貢」使が明に、との記録がある。おそらく「日本国王良懐」の名義を騙って入朝したと考えられ、翌々年の一三七六年四月にも、「日本国王良懐」が僧圭庭用(廷用文珪)を遣わして上表し、馬などを献上した。次いで一三七九年閏五月にも「日本国王良懐」が劉宗秩・通事尤虔らを遣わした、とされ、いずれも通交に成功していた。前者は後円融天皇の命を受けて、また後者は北朝政権の偽使だったようだ。

明朝で肅正が起ころ

明を建国した洪武帝は、自分が老いるに従って後継を心配するようになり、洪武十三年

(1380)に宰相胡惟庸が造反の罪で処刑され、これを切つ掛けとして功臣の粛清が始まった(胡惟庸の獄)。

同年五月、「日本国王良懷」が僧慶有を遣わしたが、「不誠」を理由に退けられる。九月には、「征夷將軍源義満」名で、僧明悟・法助らを派遣したが拒否され、連続して義満の失敗となった。

明との断交は続く

一三八一年七月の僧如瑤、八六年十一月の僧宗嗣亮は、いずれも「日本国王良懷」の名義による使節であったが入貢を拒否される。慮るに、八〇年の「胡惟庸の獄」以後、明側の姿勢は硬化したように見える。この事件は、建国の功臣だった胡惟庸を「謀反」の罪で処刑し、皇帝の専制権力を確立した、とされ、その後、林賢のクーデタ加担が「発覚」したのは八六年で、このころまで明側の対日姿勢は慎重になっていて、ほぼ七年にわたる日明外交の空白期間が続いた。

義満は国内の危機を乗り越えて

將軍義満は、朝廷内の官位を駆け上り、准三后となり、応永二年(1395)には太政大臣を辞して出家する(道有と号し、のち、道義と改める)。

国内で絶対的な自由を手にした義満は、同年、九州で独自の外交活動を繰り広げる探題の今川了俊を解任し、応永六年、大内義弘を滅ぼして(応永の乱)、生涯最大の危機を乗り越切った。国内の体制固めに腐心した義満は、明朝との冊封関係を成就するために活動を再開した。

建文帝が即位する

一三九八年(洪武三十一年)、明朝では太祖朱元璋(洪武帝)が死去し、明朝二代皇帝として建文帝が即位した。初代・洪武帝の長男で皇太子だった朱標がすでに死去したため、その次男が皇太孫に立てられ、祖父の崩御にさいして後継ぎとなる。

義満の外交は三回目に成就する

頑迷に義満の外交を認めようとしなかった洪武帝が去って、その嫡孫が即位したという情報は、筑紫の客商、肥富某によって速やかに將軍の下に届けられた。当時は日中交易は禁止されていたので、この人、肥富は、恐らく密貿易で両国を往来していた博多の商人ではなからうか。

建文帝に国書を送る

応永八年(1401)八月、「日本准三后道義」の名で起草された国書を携えて、肥富と將軍の側近、祖阿(同朋衆の素阿弥)は明へ渡った。これを受け取った建文帝側の反応も速や

かで、義満を「日本国王」として認めるべく、翌年の一四〇二年には明使が日本に派遣された。

明朝の事情で・・・

従前とは異なつて、明朝は何故このような迅速な動きを見せたのだろうか。それは、初代の四男として生まれ、建文帝の叔父に当たる朱棣（後の永楽帝）のクーデター計画であった。彼は有能な人物で、燕王（北京の首長）として明朝の北方を守っていたが。彼が皇位を窺おうとしていたことは、誰の目にも明らかだった。

建文帝は遠交近攻策を採るべく、日本の足利義満に接近し、やがては冊封することで抱き込もうとしていたのでは、とも推測されている。

建文帝の使者が義満の許へ

義満―出家後は「源道義」と名乗る―を「日本国王」に仮認定する旨を認めた建文帝の詔書Ⅱ国書は、応永九年（1402）二月、天倫道彝（臨済宗大慧派、さきの仲猷祖闡の法叔）・一庵（天台宗系教僧）の二僧に託され、南京を発つた。同年九月、北山殿（現・金閣寺）で義満はこの使者を接見する。ここに日中の国交は、およそ五百年ぶりに正式に開かれる

こととなつた。このとき義満四十五歳。はじめて洪武帝に書を送つてから二十八年目の出来事である。

貴族の反発

応永九年の明使がもたらした建文帝の国書Ⅱ詔書には、「爾日本国王源道義」とあるが、このことに対してある貴族は「今度の返牒（へんてつ）、書き様（もつ）以ての外（ほか）なり、是れ天下の重事なり」と憤懣（ふんまん）を隠さなかつたという（『福照院関白記』）。義満が事実上、明から「日本国王」に認められたことへの嫌悪感の表明であろう。

経済的な求心力を求めて

義満が「日本国王」として認定・冊封されたことには、「皇位篡奪計画」では、との指摘があつた。しかし、現今では否定され、自らが帝王（または天皇）となるという政治的な意味は無く、また野心も全く考えられない、とする見解が支配的である。

貿易のみならず経済的・文化的な求心力を獲得し、これを彼は権勢の源泉としようとしたのではなからうか。大量の銅貨や、貴族社会が求めて止まない「唐物」などの優れた品々の獲得は、恐らくその手立てでつたのだろう。ところが、明朝では――

永楽帝が即位する



明朝二代皇帝
建文帝

こうして、ようやく義満は、日明交流の重い門戸を開いたのであるが、時しも、彼の地、明国では重大な政変が起こった。

朱棣の燕王府は皇帝側を攻撃して、同年の六月、南京が陥落する。建文帝は行方が知れず、朱棣は南京で即位した（靖難の変）。「建文」の年号を廃して「洪武」に編入した上、自ら洪武帝を継いで二世皇帝と称し、永禄帝の時代となったのである。

同年六月に即位した永楽帝は、翌年（1403）の八月には日本への明使（趙居任ら）の派遣を決定する。

永楽帝は義満を冊封する

義満は、明朝の大きな転換を知り、同年の十月、遣明使（堅中圭密ら）が朝貢する。これを承けて、永楽帝は、堅中一行の帰国に合わせて明使趙居任らを派遣し、義満に対して誥命（辞令書）・金印（日本国王之印）と刻んだ印章）・日明永楽勘合を下賜した。これらは、応永十一年（1404）五月、京都の義満の許に届き、日明関係の安定した継続性が保証された。したがって、

義満が冊封されたのは・・・

建文帝の国書を受けた応永九年（1410）では無く、正しくは、永楽帝が下付された「金印」、



明朝皇帝・永楽帝

「勘合」などを義満が受領した04年とすべきであろう。

義満が行った明使接見儀礼

ただし、当時の室町時代の人々が大きな関心をもったのは、応永九年の明使接見だったので、ここでは、最初の接見の折りに繰り広げられた儀礼を蘇らせることにしたい。

どのように執り行われたのか、先ず日本側の史料によつて考察することにしよう。ただし、第一に注目される史料の『宋朝僧棒返牒記』では、義満自身がやや尊大な態度を取っていたことを示しているが、第二の資料としての『満濟准后日記』の記事では、義満が鄭重に過ぎたことを非難していることに注目したい。両者は対極的な論調で書かれており、同じ儀式を描くといっても食い違う部分が少なくないが、後者は約三十年後のものなので、史料の同時代性という観点では前者が優位にあるが、両者の記述の態度がそもそも異なっているという点を考慮すべきであろう。

『宋朝僧棒返牒記』は

「宋朝の僧が返牒を捧げるの記」は、宮内庁書陵部に所蔵され、接見儀礼に参席した顔ぶれや行列の次第などが見てとれる貴重な史料である。

「返牒記」は、朝廷の記録係ともいべき小槻氏（壬生官務家）の人たちによつて同時代

に記録・編集されたもので、(1)「応永九年九月五日記」、(2)「唐僧御対面歴名」、(3)「唐僧御相看儀次第」の三つの部分から成る。新補の表紙に打付で、「唐僧来朝捧宋朝返牒記」と外題が記されているので、目録上の書名「宋朝僧捧返牒記」はこれに拠つたものと見られている。王朝名として「宋」を用い、人や地域に「唐」を冠しているが、実際には来朝したのは明からの使者であつた。

『満済准后日記』は

醍醐寺座主であつた満済の日記で、記名は後人の命名で、自筆本の大部分が現存している。各部分は、国立国会図書館、醍醐寺三宝院に所蔵(重要文化財)される他、一部は東京大学史料編纂所、京都大学に所蔵されている。

卷子本(巻物の装丁本)には当年の具注暦を用いて覚書のような簡略な記述を行う一方、冊子本が白紙や反故文書の紙背を用いて詳細な記事を残していることから、恐らく満済が日記を書いていく過程で、次第に記事が増えたために暦に書き切れず、途中から改めて冊子を用いることになつたと推測されている。

満済は將軍義持・義教の護持僧として近侍したので、初期には禳災祈祷の記事が多いが、やがて「黒衣の宰相」と称される如く幕政の枢密にも携わるようになる。幕府内外の政治・外交の機微に関わる記述が豊富となつている。満済は情報を客観的に捉えようとし、直接関与・見聞したことのみ記述を限定しようとする自制的な態度が認められ、史料としての信憑性は極めて高いとされている。当代きつての学僧・文化人である故に、將軍・朝廷から民衆に至るまでその見識は広く、室町前期の年中行事や世相・文化・思想を知る上でも欠かせない根本史料とされている。

儀礼の概要は・・・

橋本雄著『日本国王と勘合貿易』(2013年NHK出版発行)には、上記の資料に明朝の規定を参考にして推測した、義満の明使接見儀礼が詳細に記述されている。ここでは概略を記述することにした。

明使が到着すると・・・

応永九年八月五日、明使の天倫道彝・一庵一如が兵庫津に到着し、上落して仁和寺エリアの法住寺に寄宿したが、門には兵士をつけて護衛させ、軟禁状態に置かれた。

九月五日、義満の明使接見儀礼は北山殿寢殿において行われた。公卿・殿上人たちが列立して、明使一行を迎える。儀礼の式次第を推測するに、明使が儀場に入つてくると、義満は南面した曲泉(背の寄りかかりを半円形に曲げ、脚を×字形に交差させた椅子で、最も高位の位

日朝交易年表

西暦	明暦	年号	明から日本へ	日本から明へ
1404	2年	応永11年	日明勘合貿易始まる	
1403	1年	応永10年	日本国王源道義の使者明室梵亮ら入貢。日本国王源道義の使者永俊ら入り貢。	
1402	4年	応永9年	建文帝、天倫道彝らを日本に派遣し、義満に大統領を下賜。義満が明使を謁見する。南京陥落。永楽帝即位	
1401		応永8年	日本国准三后源道義、祖阿・肥富らを明に派遣	
1400		応永7年		
1399	1年	応永6年		太祖朱元璋死去。建文帝即位
1398	5閏31年	応永5年		
1397	30	応永4年	金閣寺が創建される	
1396		応永3年		
1395		応永2年		
1394		応永元年	義満は將軍職を嫡男に譲って隠居する。太政大臣に転任、つづいて辞任	
1393		明德4年		
1392	25	元中9年 明德3年	南北朝の統一。「相国寺」竣工する	
1391		元中8年 明德2年		
1390		元中7年 明德元年		
1389		元中6年 康応元年	義満が土岐康行を討つ	
1388		元中5年 嘉慶2年	義満は左大臣を辞任する	
1387	20	元中4年 嘉慶元年		
1386		元中3年 至徳3年	「林賢事件」発生 日本国王良懐の使者僧宗嗣亮ら入貢。斥けられる	
1385		元中2年 至徳2年		
1384		元中元年 至徳元年		
1383		弘和3年 永徳3年	義満は源氏長者となり、准三后を宣下される	
1382	15	弘和2年 永徳2年		
1381		弘和元年 永徳元年	日本国王良懐の使者僧如瑠ら入貢。入貢を拒絶して日本国王を叱責。同時に日本征夷大將軍を叱責	
1380		天授6年 康暦2年	「胡惟庸の獄」勃発 日本国王良懐の使者僧慶有ら入貢。無表と不誠のため斥けられる。征夷將軍源義満の使者僧明悟・法助ら入貢。無表のため斥けられる。「日本国王」を叱責する詔を発する	
1379		天授5年 康暦元年	日本国王良懐の使者劉宗秩・通事尤虔ら入貢	
1378		天授4年 永和4年		
1377	10	天授3年 永和3年	義満は室町に「花の御所」の造営を始める	
1376		天授2年 永和2年	日本国王良懐の使者僧廷用文珪ら入貢	
1375		天授元年 永和元年	「日本国」入貢	
1374		文中3年 応安6年	義満の使者聞溪円宣・子建浄業ら入貢。無表のため斥けられる。島津氏久の使者僧道幸ら入貢。陪臣のため斥けられる。「日本国」、倭寇に掠奪された中国人109人を返還。	
1373		文中2年 応安5年	仲猷祖闡・無逸克勤ら上洛。足利義満と会見	
1372	5	文中元年 応安4年	仲猷祖闡・無逸克勤ら8人の派遣を決定	
1371		建徳2年 応安3年	冊封使として仲猷祖闡・無逸克勤ら8人の派遣を決定	
1370		建徳元年 応安2年	楊載・呉文華ら7人を日本に派遣。5人が懐良親王に殺害される。	
1369		正平24年 応安元年	楊載・趙秩らを日本に派遣。	
1368	11月 1年	正平23年 応安元年	太祖朱元璋、最初の使者を日本に派遣。使者は倭寇に殺害される	

置づけ)に着席して明使を迎える。

明使が階段を上り、義満に捧げるように国書(詔書)を高机に置き、曲桌に向かうと、義満は国書に対して跪いて三回拝礼する。

明皇帝の詔書を迎える作法は・・・

明朝初期の『大明集礼』や、中後期の『大明会典』に記されている賓礼(外交儀礼)規定によると、蕃国王が明皇帝から詔書や勅書・勅諭などを受領するときには、明から賜与された冕服(礼装用の冠と衣服)を着用し、百官とともに五拜・四拝するなど、数多の決まった所作をもつてすることが必要であった。

しかし、明の規定していた作法を義満はすべて遵守してはいないようだ。また、彼は鄭重に振る舞っているように見せながら、ときには尊大な態度を列席した公卿・殿上人たちに見せたのではないか、作爲的な対応があつたのではないだろうか。

日明勘合のシステムについて

明と朝貢国間の正式の来貢、通交船であることを証明するために明は「勘合」を発行したが、日明の勘合は、明皇帝の代替わり毎に百枚ずつ賜給されることになつていた。勘合とは、「二つのものを考え合わせる」という意味で、これが転じて二つの札を付き合わせ

て立証を行う証明書のことも「勘合」と呼ぶようになったようだ。

そこに記された片割れの文字は、台帳(底簿)の文字としか一致しないようになっており、明朝では、「勘合」を「底簿」と照合することで、その船が献上品を運んできた船かどうかを判断した。現存する「勘合」の例が無いので、形状・大きさ、査証の方法などは分からない。ここでは、残された関連の資料から推測される事項を列挙してみたい。

「勘合料紙印形」は・・・

当初、『戊子入明記』に記されたものが、日本に給付された勘合(本字勘合)の形状と考えられた。

『戊子入明記』は、応仁二年(1468)、信濃国の僧天与清啓が、將軍義政の命により、遣明正使として渡航したときの記録で、進上品、交易品、乗組員の構成、勘合、遣明船の警備等、日明関係の具体的な内容を伝える資料である。

ただし、京都市天龍寺妙智院に残されたものは、清啓自身の筆ではなく、後年の天文年間、明に渡った策彦周良が、過去の先例も参考として記した抄録である。

勘合は「割符」か？

かつては、日明勘合は、捺印した紙を半分に切り分けた「割符」、あるいはハンコ自体

を折半した「半印」の如きものとされてきたが、橋本は、そのどちらでも無く、むしろ文書を書込む用紙だった、と推測している。

二枚の紙をずらして置き、双方の紙に掛かるように捺印と墨書をするという、割印割書を施した料紙（文書を書き込む用紙）だった、というのである。

勘合の使用方法を規定した『戊子入明記』の宣徳八年六月日付け礼部文書には、「勘合の内」や「勘合の上」に咨文（文書）を書き記せ」と記載されていて、この「内」や「上」を「裏」と解することは不可能なので、日明勘合も清代勘合と同様に、中国で予め表の面に印刷された文章や割印・割書などの余白に、日本の外交文書が書き込まれた、と考えられるのである。

ここで割印として捺された印鑑は、勘合を発行した部署である明の礼部（外務省に相当）の官印「禮部之印」と考えられ、この印は、一辺十センチ弱の朱方印であった。そこで、清代勘合の実例や記録上の勘合箱の大きさから、縦およそ八十センチ、横百センチ内外の大きさの勘合には、長文の文書を書込むための十分な余白があったものと推測される。

「本字勘合」に文書を記入した

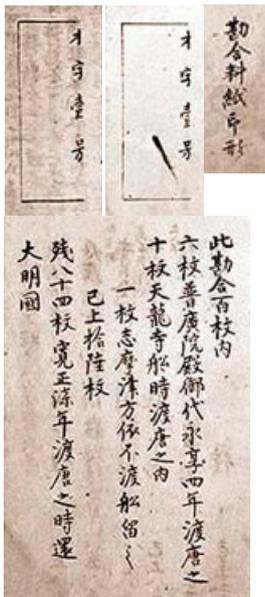
また、割印とともに日本から明へは「本字幾號」が、明から日本へは「日字幾號」が割書きされることになっていた。つまり、日本の遣明使船は「本字壹號」などの勘合（いわゆる本字勘合）に日本側外交文書を書き込んで持参し、逆に明から日本への使船「日字壹號」などの勘合（いわゆる日字勘合）を携行する決まりだった（『善隣国宝記』下巻三号文書に、「礼部が日本に日字一号勘合を使って文書を書き送ってきた」と記されている。同書は、京都相国寺の僧侶瑞溪周鳳によって著された漢文による外交資料集で、日本最初の外交史の書として知られている）。

永楽帝の勅書

応永十四年（1407）に遣明使が持ち帰った明・永楽帝の勅書が残されている（「明成祖勅書 相国寺蔵」）。なお、「成祖」とは、明の皇帝の廟号で、皇帝が死亡した後、先祖の廟に祭る時の名前である。始めには「大宋」といったが、のちに「成祖」と改称された。

年号の上に押された印文

「広運之宝」は、称号や地位を与える時に認証を行うもので、皇帝が臣下に与えるもの



とされる。また、勅書の本文中の「源道義」とは、源氏系の足利氏で法名を道義といった義満のことを指す。

「明成祖勅書別副」

下賜された物品名を一覧として記した勅書の別副が、徳川美術館に残されている。

勘合貿易の在り方への批判

「勘合」による貿易は、異国に臣従する形式をとる朝貢＝貿易だった。そのため、室町幕府が行った貿易、外交の在り方に対しては批判が常について回った。しかし、明の皇帝から与えられた「日本国王」号は、通交上の名義に過ぎなかったにせよ、東アジアの国際関係のなかで、諸国が相互に認めていたように、「国王」号によって正式な国交が樹立されたわけである。

貿易の権益によって、国内諸勢力の関心は室町將軍家の外交権に集中し、將軍家の政治的求心性の源泉の一つになった。「日明勘合」は外交資格証明の手段として、將軍家が独占

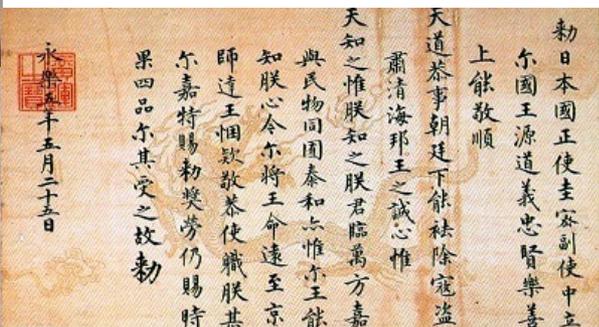
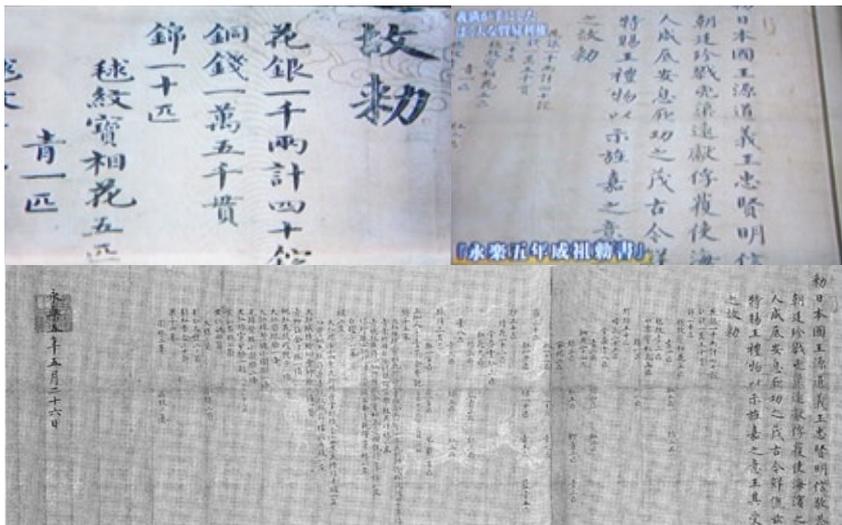
的に保持していたので、貿易を望むものは將軍家に働きかけて、鑄を削った。

遣明船の運行は・・・

応永十一年(1404)から天文十六年(1547)まで約一世紀半の間に十七次(延べ84隻)にのぼり、日明・勘合貿易に用いられた。

遣明船は当初、幕府が船主となって運航していたが、後には有力寺社(相国寺、三十三間堂など)や有力守護大名(細川氏、大内氏など)が船主となり、これに博多や堺の商人などが結びついて運行された。貿易の主導権を巡って細川氏と大内氏が争い、大永三年(1523)に寧波で衝突(寧波の乱)したのちは、大内氏が貿易を独占することとなり、本拠の山口は応仁の乱で荒廃した京都より繁栄したという。

応永十三年(1406)に帰国した第二次遣明船は、六



七隻だったという記録が残っている。応永十七年(1410)に將軍義持が中止するまでの初期六回の遣明船の規模は同程度だったと推定されているが、二十一年の中断を経て、將軍義教が永享四年(1382)に再開して、天文十九年(1550)までに十一次五十一隻(うち、幕府所有船は七隻、朝廷船一隻、残りは守護大名、寺社所有船)が渡航した。

前記した『戊子入明記』によると、遣明船は700〜1700石の大型船で150人程度の乗員(内水夫20人)であったという。

勘合貿易で交流したものは・・・
中国からは銅銭、生糸が輸入され、またわが国からは硫黄、刀剣、扇などが中国に輸出された。

大陸との交流によってもたらされた文化的、経済的なアイテムには、寺社の建立、建築様式・美術・工芸、その他数多のものがあるが、これらは、室町時代に入って激増した。金工品、染織品、漆器、陶磁器のほか、書画、典籍、香料、染料、生糸にまでの多品目で、所謂「唐物」に対しては、上層階級が熱狂的になってこれを受入れた。

このような動静は、政権・興隆の鍵となったのであるが、今では海外から注目されている「日本文化」は、実に、このころ成立したものである。

遣明船

「真如堂縁起絵巻」より 真正極楽寺所蔵

筆者は、掃部助久国 かものすけひさくに 大永四年(1524)

紙本着色真如堂縁起は三巻。

上巻は、天台宗円仁ゆかりの本尊である阿彌陀如来像の由来、中巻は真如堂建立の由来や戒算・貞慶・法然などの逸話、下巻は応仁の乱以降の本尊の流転と再建の歴史が描かれている。

詞書は後柏原天皇、尊鎮法親王(後柏原天皇の皇子)、三条西実隆(後柏原天皇の縁戚関係の公家)らの筆で、詞書の起草者から筆者までの制作事情がすべて明らかな稀有な絵巻物。



「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

市民フォーラムは地域情報紙「市民プレス」を編集・発行し、無料で配布します。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

編集部 原宛にどうぞ

TEL 090 (3048) 5502

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行